

特集 東日本大震災の復興計画と中長期的支援

広島足跡・被爆者の生活実態

秋葉 忠利

東日本大震災後の復興計画立案や中長期的支援実施のために広島足跡を振り返ることが役立つかもしれない。役立つとすれば、強調したいのは、広島の復興が、被爆者の生活実態を元にした計画に沿って行われたことであり、そのためには被災者の声を自治体がまとめ、国レベルの施策に生かす必要がある。これを可能にするためには情報の公開が何よりも重要である。

より具体的なレベルでは、広島足跡を記した3冊の本が参考になる。濱井信三著の『原爆市長』、中国新聞社編の『ヒロシマの記録』そして長田新編の『原爆の子』である。被爆者の生活実態に即した形で被爆者の心の動きの変遷が読み取れるとともに、東日本大震災への教訓も読み取れるかもしれない。

66年間の被爆者の精神史を、大まかにまとめると、被爆者による三対の言葉の変遷が鍵になる。各対の初めの言葉は被爆直後ならびにそれから余り時間の経過がない時代の言葉であり、対のもう1つの言葉は比較的最近の言葉である：

- ①「死にたい」から「生きていて良かった」への変遷
- ②「忘れたい」から「忘れてはならない」への変遷
- ③「原爆にあわないとわからない」から「こんな思いをさせてはならない」への変遷

<索引用語：被爆者、生活実態、情報公開、原爆市長、ヒロシマの記録、原爆の子、「死にたい」、「生きていて良かった」、「忘れたい」、「忘れてはならない」、「原爆にあわないとわからない」、「こんな思いをさせてはならない」>

1. はじめに

このようなシンポジウムが開催されること自体、66年前、広島に人類最初の原爆が投下された直後とは隔世の感がある。原爆により、広島市内・その周辺部で医療関係の仕事に従事していた方々の3分の2が亡くなっただけでなく、生き残った医療関係者もほとんど被爆し、それでも他の被爆者のために生命を賭して医療を提供、その後も献身的な努力を続けられた。これら多くの医療関係者に改めて深甚なる感謝の意を表す。医薬品はほとんどなく、放射線についての研究もまだ十分ではなく、したがって専門家といえども知識には限界があった時期に、英雄的な行動だといかない。

それからほぼ66年経ち、その間、多くの研究者、医療関係者をはじめ、多くの皆さんの御努力により医療面はもとより、人間や社会、世界を理解し考える枠組みそのものが大きく変わった。そうした努力と進歩の延長線上に今回のシンポジウムが位置付けられる。このシンポジウムを契機として、東日本大震災の被災者の皆さんのために具体的なレベルでの支援がさらに充実され、復興に弾みがつくことを祈る。

このシンポジウムで、何よりも心強く感じたことは、新潟、岩手、宮城、福島、茨城の被災地で、精神医療関係者の皆さんが地道にかつ創造的な活動を展開されていることである。特に被災者の皆さんの「生活」レベルでのケアに専門家の皆さん

が焦点を合わせていらっしやることに感動している。広島・長崎の経験で、最も大切なことの1つがこの点だからである。シンポジウムの中でこの点についての広島の戦後の歴史をお話したいと考えていたが、被災地で活動されている皆様の報告から、66年という時間の持つ意味がいかに大きいものかを改めて考えさせられた。

あえて、広島の経験を大まかにまとめると、広島が現在のように復興し、世界的にも美しい都市、素晴らしい都市として評価されるようになったのは、復興の原点として市民の生活実態を重んじたからだと言って良い。

こうした一般論ではなく、具体的なヒントも広島の経験から汲み取れるかもしれない。しかし、それは、被災地の現状を知らない立場の人間が判断できることではなく、現地で苦勞されている被災者の皆さん、そして被災者の皆さんに寄り添い、復旧に尽力されている皆さんにのみわかることなのではないかと思う。

2. 『原爆市長』

幸いなことに、広島の復興についての貴重な記録が残されている。1つは、最近復刻版が出版された『原爆市長』である。引退後に濱井信三市長が書かれた記録である。もう1冊は、中国新聞社が発行している『ヒロシマの記録』だ。原爆後の広島での平和に関する中国新聞の記事を写真と共にまとめたもので、復興そしてその後の広島がよくわかる。もう1冊は、広島の長田新教授が編纂された『原爆の子』だ。子どもたちの経験、子どもたちの眼で見た被爆後の広島から、大人には見えない真実が浮かび上がって来る。

『原爆市長』は、初めての公選市長として復興の陣頭指揮を執った濱井信三氏の回顧録である。濱井市長は被爆当時、配給課長として市民の生活実態を一番よく理解できる仕事に従事していた。

8月6日には、自らトラックに乗り食料の調達のために、今なら「ボランティア」と呼ばれるであろう若者たちとともに走り回り、被爆した市民に食糧を届け続けた。

事前の準備も万全だった。空襲に見舞われた際の市民の食糧確保の責任を負っていた濱井課長は、市内の学校で炊き出しをするという計画が机上論であるという建言に基づき、広島市全域が空襲の被害にあっても、近隣の自治体から握り飯を届けて貰う「握り飯計画」を策定し、事実、7日の朝には周辺の町村から握り飯が届いた。濱井市長の言葉に依れば「被災後10日間は、市民の主食に関する限り、全く心配せずに済んだ」のだった。

その後の復興も、木原七郎、濱井信三両市長をリーダーとして、市民生活を立て直し、復興計画を練り、それを国や世界が応援する形になった。

今の時代には通用しないことかもしれないが、食糧事情の極端に悪かった被爆後の広島で、「市は焼け跡に帰った市民に、自分の土地であろうと他人の土地であろうと構わない、できるだけ耕作して、さつま芋なり、ナンキンなり、食べ物をつくるように奨励指導した」といった、現実的かつ柔軟な施策を展開した。

同時に、都市計画の策定に当っては、未来の広島市の姿を描きつつ、また防災の観点から幅員100メートル、延長8キロの平和大通り（通称100メートル道路）を計画の中心に据えるという大胆なアイデアを実現した。

2冊目の『ヒロシマの記録』は、どちらかというところ「社会部」的な視点で編集されており、市民生活が自然に理解できるという特徴がある。また世界的に著名な人々が広島を訪問していることも、大変興味深い問題提起になっている上、子どもたちの生活に至る所に取り上げられているのも大切な点である。また、写真に写っているのは、カメラマンが意図した対象だけではなく、当時を理解する上での貴重な情報を提供してくれている。

3. 『原爆の子』

『原爆の子』の大切さについては、改めて申し上げるまでもないが、東日本大震災後の様々なケアの中でも子どもたちへのケアがいかに大切なのかは、放射線の影響だけを考えても明らかであろう。被爆した子どもたちは、自分たちの運命を静

かに、また決然と受け止め、悲しみや苦勞を乗り越え、子どもとして、と言うだけでは物足りないほど、人間として精一杯生きようとした。その様子が具体的・感動的に伝わってくる本書の価値は高い。

こうした広島の記録から、この度の震災への教訓を汲むとすれば、被災地の自治体や、被災者に寄り添って活動している専門家やボランティアからの発信に、国が耳を傾けて支援を行うこと、そして復興計画を立てるということではないだろうか。

そのためにも、被災された皆さんが、今の時点での記録あるいはメモを残すことが大切になる。現在の悩みや困っていること等、難しい場合もあることは想像に難くないが、できるだけの整理をして他の人たちに、行政やマスコミも含めて、伝わるよう努力をすることは重要であり、その積み重ねが未来への方向を示すことになるはずだ。同時に、書くこと、表現することが心のケアになる点も重要である。

行政的手続的にも記憶が鮮明な内に記録を残すことが重要である。様々な理由で、被爆者健康手帳の申請を行う時期が遅くなった被爆者の場合、当時の正確な記録のあるなしが決定的になるケースがある。東日本大震災については、今後、被災者支援がどう展開されるのか予測できない側面もあるが、できるだけ正確な記録を残すための「被災者手帳」のようなものを発行し、被災者個人個人の記録を残すことで、将来の支援策、特に被曝線量の推定に役立てることを検討しておくメリットは大きいと思われる。

『原爆の子』に手記を寄せた一人の子どもは次のように述べている。

原爆体験の手記を書くことは、私たちにとって決してたやすいことではありませんでした。手記をしたためておりますと、生々しい記憶がつぎからつぎへと浮かんできて、ちょうど癒えかけた生傷をうがつような気がして、幾たびか鉛筆を投げ出してはやっとの思いで書きあげま

した。

けれども私たちは手記を書いていくうちに、……しだいに明確に問題のありかを捉え、原爆の惨害にあいながら原爆のもつ重要な意味についてほとんど無知であった状態から脱却して、真剣に考え、いろいろな疑問をいただき、さらに正しい理解へと近づく方向に進んでいきました。

しかし、自治体そのものの機能が大きく損なわれているケースもあり、しかも、広島の場合には周辺の自治体からの支援もあったこと等、現在の東日本とは事情が違うかもしれない。仮に自治体として住民の声を十分に把握できていない場合、あるいは何らかの理由で自治体からの発信が上手く行かないケースがあったとすると、皆さんのような専門家の報告が自治体の発信の代りになるはずであり、市民が直接インターネット等を通じて発信することも可能かつ効果的である。

4. 情報公開

こうした発信が可能かつ意味を持つためには、情報の公開が前提になる。原爆後の広島では、GHQの意向で原爆についての情報は「プレス・コード」として知られていた検閲制度により全て規制されていた。小説や詩歌も含めて全ての出版物、学術論文やニュースまで検閲された。1952年にこの規制が解除になるまで、ほとんどすべての情報は、ごく内輪の人たちにしか伝わらなかった。そんな中で、『原爆の子』の出版が許されたのは例外的なことだった。

この情報規制の結果、多くの二次三次被害が生じた。例えば、3から17週齢の間に母親の胎内で被爆した胎児には、放射線の影響が小頭症その他の障害として現れたのだが、このことを、アメリカの研究調査機関であったABCCの研究者は把握していたにもかかわらず、母親には「栄養が足りないから」といったような説明をしていたとのことである。子どもたちへの適切な医療の提供はされず、母親をはじめ、家族等にも不必要な心労が重なることになった。

胎内被爆については、1965年に内部告発によって真実が明るみに出され、その結果、被爆者としての認定も受けられるようになり、援護の対象にもなったが、情報の公開の大切さ、そしてその情報に基づいて、行き届いたケアを提供する仕組みが必要だという点は、このケースだけからも理解していただけるはずである。

5. 被爆者意識の変遷

1) 「死にたい」から「生きていて良かった」

多くの被爆者は、長い時間をかけてこうした悲劇を自らの生活を通して生き抜き、苦しみの中から未来とのつながりを見出し、それが世界的にも評価されるメッセージになった。少々乱暴にはなるが、こうした変化を三対の言葉を通して要約しておきたい。

この三対は、第一に「死にたい」「死んだ方がまし」から「生きていて良かった」への変化、次に「忘れない」「思い出したくない」から「忘れてはならない」への変化、そして第三は「原爆にあってみればわかるんだ」から「こんな思いを他の誰にもさせてはならない」への変化である。

各対の前者は、被爆後かなりの間、被爆者から私たちが直接聞いたり手記や証言集の中によく現れた言葉である。現在では全く使われないという訳ではないが、その頻度は少なくなっている。その代り、より頻繁に聞くようになったのが、各対の後者である。私個人として多くの被爆者の手記を読み、証言を聞いてきた結果として、このようにまとめることが適切だと感じている。

これらの移り変わりについて、先ず「死にたい」「死んだ方がまし」から「生きていて良かった」への変化から、簡単に説明しておきたい。

被爆後の惨状は「生き残った者が死者を羨んだ」と表現されることもあるくらいだから、苦しいつらい環境の中では、こうした言葉が発せられるのは、ある意味当然だった。「死にたい」がただ単に比喩的な表現でなかったことは、被爆直後にも、失った意識を取り戻した被爆者の中に、川にあるいは鉄道に身を投げるといった形の死を選

んだ人たちがいたという証言からうかがうことができる。また、「死んだ方がまし」という言葉は何に比べてなのかという点が大切だが、それは食べることさえままならない苦しい生活であったり、原爆による疾病に対する治療が十分に受けられないことであったり、被爆体験の重さが理解されないことであったり、将来への希望が持てなかったりといった、切実な体験に裏打ちされている。

それが、「生きていて良かった」に変わった契機は、生活ができるようになったり、治療を受けられるようになった等の環境が整備された結果として、苦しみの軽減されたことが大きかったはずである。それと共に大きな契機になったのは、多くの人が自分たちの言葉や主張に耳を傾けてくれ、その結果、自分たちの望む方向に社会・世界が少しでも動いていることを実感できたときだった。例えば、1955年に開かれた第一回の原水爆禁止世界大会で証言をし、その証言に感動した多くの参加者の声に励まされた元原爆資料館館長高橋昭博さんは、その時「生きていて良かった」と感じたと語っている。

彼の願っていた「2020年までの核兵器廃絶」が実現すれば、再度、高橋さんの「生きていて良かった」を聞くことができたはずなのだが、残念なことに、去る11月2日の朝、他界された。

2) 「忘れない」から「忘れてはならない」

2つ目は、「忘れない」「思い出したくない」から「忘れてはならない」への変化である。

嫌なこと、苦しいことを忘れたいと思うのは人間として当たり前のことだから、この点については議論する必要はないと思うが、念のため、これがいかに強いものであったかを示すエピソードを紹介しておきたい。

現在、原爆当時の痕跡を残す建築物としては、広島市の中心地に保存されている、通称原爆ドームが典型的なものである。1996年にはユネスコの世界遺産として登録された。原爆ドームの保存は、被爆後ほぼ一年掛って策定された復興都市計画の中でも検討されている。当時の状況を濱井市

長は『原爆市長』の中で、ドームを今のままの姿で残すべきだという声に対して、それに強く反対する声も少なくなかった、それは、「被爆でかわいい子供を殺し、最愛の夫や妻、親兄弟など肉親を失った人たちにとっては、ドームの姿はいつまでも胸をえぐる」からだとして述べている。

その後1960年代になって、原爆ドームの保存調査費が初めて予算に計上されることになったのだが、大きな力になったのが、被爆者の意見だった。濱井市長は「10数年の歳月の流れが、被爆者たちの気持を変えさせた」と回想している。

しかし、被爆体験を語る際に被爆者の皆さんが感じる痛みは、66年経った今でも強烈なばかりではなく、66年間、比較的平穏な暮らしに恵まれた被爆者が、退職後に突然、それまでは記憶の底に沈んでいた当時の有様のラッシュバックに悩まされるという報告もなされているほどだ。

それほど強烈な記憶、したがってできれば「忘れてしまいたい」記憶を呼び覚まし、被爆当時の痛みを再体験することになっても、証言を続けた被爆者が多くいることこそ驚きであり、感謝しなくてはならないことだと思う。

それは、ジョージ・サンタヤーナの言葉に依れば「過去を記憶できないものは、その過去を繰り返す運命を背負わされる」という真実を被爆者も自ら感じたがゆえに、未来の世代には自分たちと同じ体験をさせてはならないという使命感のなせる業だと言っても良いのではないだろうか。

3) 「原爆にあえばわかる」から「こんな思いをさせてはならない」

三つ目は、「原爆にあってみればわかるんだ」から「こんな思いを他の誰にもさせてはならない」への変化である。

被爆の実相が理解されなかったとき、あるいはなぜ核兵器の廃絶が必要かを理解して貰えなかったときなど、被爆者の中には、「自分も原爆にあってみればわかるんだ」という趣旨の言葉を投げ掛ける人もいた。それは、「自分たちが理解して貰えないのは、あの人たちが原爆にあっていない

からだ」の対偶命題だが、わかって貰えないフラストレーションの説明でもあり、被爆者同士の共感を高めることにもつながった。

一口に被爆者と言っても、広島は大きな都市である。被爆当時の人口は約35万人、年齢、職業、教育、宗教、思想、信条、趣味、その他、多くの違いのある人たちが住んでいた。その違いを乗り越えての被爆者同士の共通理解が「あんな思いは自分たちでたくさんだ」であり、「子どもたちには、絶対こんな経験をさせてはならない」であったとしても不思議ではない。その「子どもたち」が自然に「他の誰にも」まで広がって行ったのも、被爆体験がいかに悲惨であり残酷であったのかを考えると頷けるシナリオである。

恐らく、「他の誰にも」が指す対象の範囲は、最初は漠然としていたのだろう。時の経過とともに徐々にその輪郭が鮮明になり、通常は敵と見做されるような人たちにまで広がったのではないだろうか。その結果、被爆者の言葉が、報復や敵対の哲学ではなく、和解の哲学を表すようになった。

多様な人が住む地域、特に都市で、異なった価値観を持つ人々が、それでも生活を共有しつつ、つらい毎日の意味を共有するために一番役に立つのが、いまだ現実になっていない未来を共有するという視点からの表現であることは、偶然ではなく、人類進化の結果、私たちが長い時間をかけて遺伝子レベルで受け継いだ、貴重な財産なのではないかと考えている。

6. 最後

被爆者の願いである「こんな思いを他の誰にもさせてはならない」を具体化するために、広島・長崎両市をはじめ、「平和市長会議」に加盟している世界中の多くの都市が「2020ビジョン」を策定し、2020年までに核のない世界を実現すべく2003年から運動を始めた。被爆者のメッセージは、世界の多くの都市の経験——戦争等の被害を元に、「Never again!」は多くの都市のメッセージでもあった——と重なる部分が大きかったために、2003年には加盟都市数が500ほどであっ

た平和市長会議は、現在5,000を超えるまでに急成長した。平和市長会議の掲げた最終目標を達成する上での中間目標は、核兵器禁止条約を締結することだが、世界のNGOをはじめ、志を共にする国々、国連等との連携のもと活動は着々と進んでいる。

被爆者の願いを現世の具体的な目標につなげる役割を担っていたはずの原水爆禁止運動・核兵器の廃絶運動の歴史を振り返ると、イデオロギーに左右されたり、マスコミの思惑に振り回されたりといった分裂と混迷が大きな特徴である。輝ける未来を創造する上では、同じ方向を目指すべき人々や団体が、いたずらにエネルギーを浪費する結果になってしまったことから、私たちは教訓を得ることが可能であろう。核兵器のない世界を目指す運動が、本来の人道的な意味での被爆者のメッセージの建設的な表現、民主主義の基本的な構成単位である市民の運動として生まれ変わったのは、被爆者の生活に根差した活動が定着したからに他ならない。

東日本大震災後の復興についても、まだまだ悲しくつらい、そして苦しい状況にある被災者の皆さんの中から、やがては未来を創る上での貴重なエネルギーが湧き出てくることになる信じているが、広島、そして長崎の66年から何らかの教訓を汲んでいただければ、こんなに嬉しいことはない。

謝 辞

第107回日本精神神経学会学術総会でのシンポジウム「東日本大震災の復興計画と中長期的支援」に参加させていただき心からお礼を申し上げたい。

また、このシンポジウムの主催者である日本精神神経学会、学術総会会長の三國雅彦先生、また運営委員の皆様から敬意を表したい。

文 献

- 1) 長田 新編：原爆の子。岩波書店、東京、1959
- 2) 中国新聞社編：ヒロシマの記録。中国新聞社、広島、1966
- 3) 濱井信三：原爆市長。シフトプロジェクト、2011

A-bomb Experience and Hibakusha Lives

Tadatoshi AKIBA

Professor, Hiroshima University

The A-bomb experience of Hiroshima may shed light on the reconstruction plan of the Eastern Japan Earthquake and Tsunami and on implementing middle to long range care plans for the victims of the catastrophe. An important element in the success of Hiroshima's reconstruction was the understanding of the realities of everyday life of citizens and hibakusha by local and national government, and incorporation of those points of view into the reconstruction plan. Sharing of accurate and fair information about the disaster, restoration, and reconstruction with citizens was and still is a prerequisite for success.

To convey learned lessons from the Hiroshima experience, three books are helpful: "A-bomb Mayor" by Shinzo Hamai, "The Meaning of Survival" compiled by the Chugoku Shimbun and "The Children of the A-bomb" compiled by Arata Osada. They help understand the history of hibakusha psychology from the point of view of their everyday lives and may help those affected by the Earthquake and Tsunami.

To summarize the history of psychological changes among the hibakusha, three key transitional pairs of statements used widely by them over the span of 66 years help show the change in their attitude and emotional outlook. Each pair consists of an expression from the period immediately following the bombing and a second more recent expression:

- ① Transition from "I would rather die." to "I am glad I am alive."
- ② Transition from "I would rather forget." to "We should not forget."
- ③ Transition from "You will understand if you are a victim." to "No one else should ever suffer as we did."

<Author's abstract>
